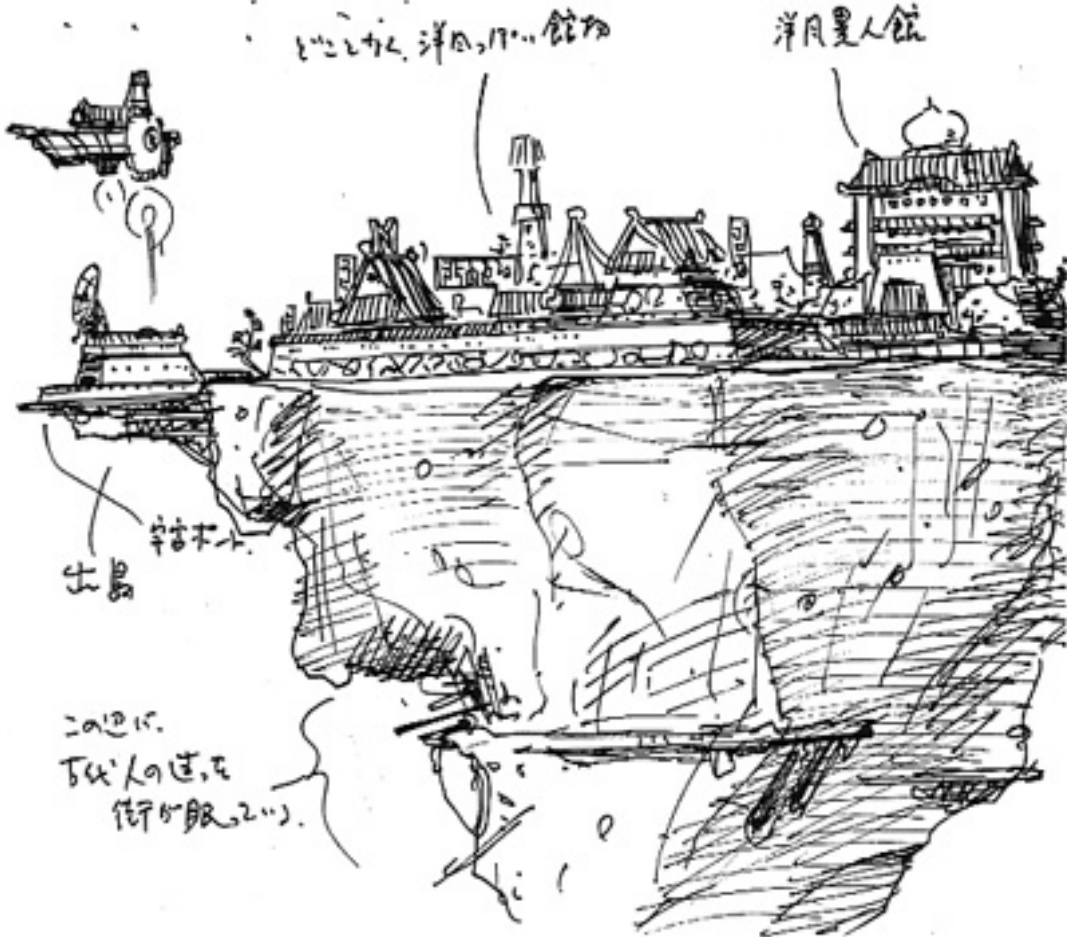


1/2 山崎

第一の島

七島の1500mの島  
大正で七島の1700mのマカオの様ナ。  
少し洋風、月川零国島のお2街。



# サムライメックロ・天 シナリオノベル

野間口修二 著

[ ver.1.0 ]

画 ・ 森川幸人

編集&レイアウト・ゼロ

1993年3月30日刊行  
2003年3月21日改訂

内容の無断転載禁止

© SAMURAI MECH ZERO

<http://homepage.mac.com/samuraimech/>

## 第一章 長崎

### 一、出島

見渡すかぎり真っ暗な宇宙の海の彼方に、かすかな光点が現れる。

光点はほだいに明るさを増しながら大きくなり、やがて島の形になり、みるみる近づいてきた。

島全体が人工の光で輝いている。両脇に朱色で塗られた巨大な柱が立ち、その下でサーチライトがゆっくりと回転し、船に合図を送っている。

大穴山熊五郎は船窓から、派手に彩られた島のようなすを見つめていた。

「あれが出島ですね……」

熊五郎の隣に立っていた商人風の男がつぶやいた。

「江戸群島にただひとつの宇宙港。それがあの出島ですよ。長い旅でしたが、やっと着きましたね」

「この狭い船室にヤマジで飽き飽きしたよ。自由に歩き回れるんなら、地獄に降りたって構わない気分だ」

部屋の隅にかたまって座っていた町人のひとりが言う。その隣の、バクチ打ちらしい男が低く笑った。

「江戸群島か。……ほんとうに地獄かもしれねえ。いや、もしかした、極楽かもしれねえさ。誰にわかる？ 俺たちが着いたのは、俺たちのまったく知らない世界なんだからな……」

熊五郎は船室の中を見渡した。一見して犯罪者と見える、こすっからい目つき、年齢不詳の男がいる。新しい世界でチャンスを狙むのだと言う陽気なチンピラ風の若者がいる。いつも眠っているように見える、高齢の老人まで、この船には乗っていた。

熊五郎の視線に気づいたのか、老人が不意にこちらを見た。そして静かな声で言った。

「おサムライ、この船に乗っている者は、みな、それぞれの事情を抱えて、遠いこの地までやって来たものばかり……。そんな詮索するような目をしてはいかん。

あなたもそうであろう。あえて尋ねませんが……」

熊五郎が何か答えようとしたとき、老人は続けて言った。

「……おお、船が港に着いたようじゃ」

船室の扉が開き、船員が顔を出して到着を告げた。



棧橋に降り立つと、出島は窓から見えていたよりこじんまりとした印象だった。ほかの客たちは一様にほっとした顔でのびをし、あたりを見回している。

「まずは税関で入国手続きってやつがあるんだよ」

町人がそう教えてくれた。

「それが済んだら、長崎の街で一杯やって、へへへ……」

若いチンピラが笑っているそばを通り過ぎて、熊五郎は別の棧橋の方へぶらぶらと歩いてみた。

もうすぐ港町を出ていこうとしている船がある。その船に乗り込もうとしている、金持ちらしいでつぶり太った男がいる。熊五郎は男に話しかけてみた。

「……冗談じゃありませんよ。こんなところには、もうこれ以上いられません。別荘は他にもあるんだ。さっさと逃げ出すに限りますよ」

こんな返事が返ってきた。

「あなた、この群島に何をしに来たのか知らないが、すぐに逃げ出したほうがいい。この群島には、わけのわからない怪物たちがうろついているんだ。とても危なくて、いられたものじゃありません。……おお、船が出てしまう！」

男はあたふたと船に乗り込んでいった。怪物？ 怪物とはなんだろう？ 熊五郎はいま聞いた言葉をいぶかしい思いで反芻しながら、税関の方へ歩いていった。



税関ゲートの前で、同じ船から降りた客たちが数人、順番を待っていた。

「ずいぶん時間がかかりやがるな」

「まったく役人つてのは、融通がきかぬ生き物だからな……」

口々にぶつぶつとつぶやきながら、つきつぎにゲートに消えてゆく。熊五郎は、こすつからい目つきの悪党面の男だが、壁によりかかったまま列に並ぼうとしないのに気づいた。どうしたのか尋ねてみたが、「うるせえ！」と苛立たしげな返事が返ってきた。これ以上は余計なおせっかいになる。熊五郎は男を追い越して、ゲートに入ってしまった。

「持ち物は何もないんだね？ 身分証明は……」

大穴山熊五郎……浪人か。

……おおかた、食い詰めてここまで流れついたところか？

腕の方も、たいしたことはなさそうだな……」

係員は、まるで値踏みするような眼で熊五郎を見たが、すぐに興味をなくした様子で、「通つてよろしい」と手を振った。

いささかむつとしながら熊五郎はゲートを出た。その先は短い狭い通路になっている。

通路の中ほどまで来たとき、ふいに背後で悲鳴があがり、誰かが誰かを突き倒す音がした。

「不法入国だ！」

絶叫が聞こえたかと思うと、眼を血走らせた男がひとり走り出してきた、あやうく熊五郎にぶつかりそうになる。あの男だ。

「どけ！」男は低く言う。

「……誰かつかまえてくれ！」係員が声をからして叫ぶ。

その声を聞くと、男はいきなり懐から短刀を出して抜きはなち、「どかねえか！」とわめくなり熊五郎に切りかかってきた。

勝負はあつてなくついた。一瞬後には男は熊五郎に強烈な一撃を浴び、足下で痙攣していた。数人の係員が駆け付けて来て、ひとりの男がそばにしゃがみこみ、死んでいないことを確かめてから、熊五郎の方に向き直った。

「いや、ご協力ありがとうございます。……まったく、太い野郎だ。……ええ、来た場所へ強制送還することになりますね。……いやいや、助かりましたよ」

そう言うなり、係員たちは男を数人がかりで担ぎ上げ、税関の方へ運び去ってしまった。熊五郎はちよつとぼかんとして立っていた。とんだタダ働きをしましたつたようだ。役人は礼のしかたを知らない、と慥然としながら歩きだそうとして、誰かが通路に立ちふさがっているのに気づいて眼をあげた。

「おサムライ、見かけよりは腕が立つようですね……」

笑いかけているのは、さつき侮蔑的なことを言った係員だった。

「……あんたぐらいの腕があれば、この群島でチャンスを手に入れることができるかもしれない。

賞金稼ぎですよ。この世界で大金を掴むにはいちばんてつとり早い方法だ。……もつとも、命がけですがね」

そう言いながら、係員は、薄い金属製の板のようなものを手渡した。

「……これをあげましょう。これを持って、口入れ屋においでなさい。きつと、いい仕事がありますよ。では、幸運を！」

係員はにやりと笑うと、手を上げて背中を向けた。

通路を出たところに、同乗客たちが待っていて、熊五郎が出てくると口々に称賛の声を上げたが、ふと商人が熊五郎の手に持ったものに眼を留めた。

「それは……。噂に聞くへ用心棒手帳ですね。賞金稼ぎのための、携帯用電腦ですよ。ネットワークとつながって

いて、いろんな情報が引き出せるはずですよ。いいものを手に入れましたね」

「ほお……あんた、賞金稼ぎをやるのか。そりゃいいや。バンバン稼いで、いつかどっかで会ったら、おいらに酒をおごってくれよ！」

チンピラが言つて苦笑いを誘い、それをきっかけに、同じ船で旅をしてきた者たちは荷物を担ぎ上げ、散り散りに別れていった。

「あの、不法入国しようとした男。……おそらく別の世界で悪事をおかし、居所がなくなって、この地に逃れてきたのじゃろ。……やはり、みな、それぞれの事情を抱えておつたな……」

最後に残った老人がそうつぶやき、のろのろと立ち去るのを見送つてから、熊五郎はあらためて出島のなかを見渡した。



そこは大きなロビーになっていて、江戸群島へ到着したばかりの人々、群島から出て行こうとする人々、それに旅行者相手の商売をする者たちでごったがえしていた。

「あんさん、長崎の情報は欲しくないかい？」

背の低い男が話しかけてくる。どこの土地にもいる、情報やと呼ばれる奴らだ。

「五十M Cで、長崎の重大な秘密を教えてやろう。こいつはおいしいぜ。どうだい？」

黙つて金を払うと、男は熊五郎の耳元で囁いた。

「……絹間屋の旦那は、高いところが好きなのさ。はい、これで終わりだ」

そう言うと、もう用は済んだと言わんばかりに顔をそむける。

苦情を言おうとしたとき、誰かに肩を掴まれた。振り向くと、見知らぬ中年の町人が首を振っていた。

「いけないね。情報屋にケチをつけちゃいけないよ。奴らは大袈裟なことを言つて高い金を取るが、騙すことはしない。

奴らの言葉は一見価値がないようでも、ちゃんと意味があるんだ」

そう言われては、これ以上文句をつけるわけにもゆかない。そこを立ち去ろうとすると、また誰かに呼び止められた。「それ、その若いの。」

おぬしにはな、たぐい稀なる剣の素質があるとみた！だが、惜しむらくは好漢、まだ戦うすべてを満足に知らぬな。

うむ。わしに教われれば、おぬしの素質はイッキに開花することじゃらうて。うむうむ。

さあ、黙つて十五M C払いなされ」

声の主は、薄汚れた羽織袴をつけ、両脇に二本の木刀を抱えた老人だった。ぎょろりとした眼はこちらを見つめて微笑の影も見せないが、どうやらすこし狂っている気配もある。

どうせ詐欺師のたぐいだろうと思ひながら、熊五郎はその老人にふと興味を感じ、おとなしく金を払うことにした。

老人は深くうなずいて、木刀を一本熊五郎にほうりなげると、残った一本を青眼にすつと構えた。その構えを見た老人、熊五郎は身がひきしまるのを感じた。未熟な熊五郎にさえ、老人の構えは、なみたいていのものではないと見えた。

「さて、打ち込んできなさい」

老人は熊五郎に自由に打ち込ませながら、さまざまな構えや大勢を実演してみせてくれているようだった。稽古はずいぶん長い時間続いたが、熊五郎がろうじんからやつと勝ちを収めたところで終わった。

「よし、戦いのなんたるか、少しはわかったようじゃな。もう、この老人の出番はないようじゃ」

だが老人が熊五郎に勝ちを譲つたことは、はっきりしていた。

「また来るがいい。いつでも稽古をつけよう。だが剣とは、自らの生き死にを賭けなければ上達せぬもの。この江戸群島そのものが、おぬしにとって道場となることだらう……」

老人は破顔すると、行け、というふうに首を動かした。もはやその顔に最初に感じた狂気の影などはなく、そこにいるのはみすばらしい格好はしているが、まぎれもない剣の達人だった。まわりを取り囲んでいた群衆がわらわらと散つてゆくなかで、熊五郎は謎の老人に深々と頭を下げた。

ロビーの一画に、何やら人だかりがしている。数人が集まって何かを眺めている。壁に「江戸群島観光案内」という看板がかかっていた。近づいてみると、壁に大きなパネルが二枚貼つてあるのだった。パネルの上に、それぞれ「江戸群島の名所」「長崎の名所」と書いてある。

熊五郎は、集まった人たちの話を耳に入れながら、パネルを丹念に見ていった。それによると、江戸群島は、西南から北東へ連なる六つの島で構成されている。もともと西南にあるのがこの出島のある「長崎」。江戸群島と外の世界をつなぐ、唯一の玄関口。その東に「蜘蛛巣城」という古城の城下町がある「蜘蛛巣島」。三つめは、全体が大遊園地になっている「極楽アイランド」。さらに北に、江戸群島の中心となる大都市「ニュー大江戸」を乗せた最大の島「江戸島」。ここまでが、観光案内に説明のある島だった。その北東にある、球形をした第五の島と、小さく描かれた第六の島には、なんの説明もついていない。

長崎の案内図をいちおう頭におさめて立ち去ろうとして、熊五郎はふと、隣にいくつか並んでいる広告ポスターに眼をひかれた。

「腕に覚えのあるアナタ、大儲けしてみませんか？」

土方仕事から用心棒まで、

創業五十年、信頼度バツグン！

仕事探しなら、長崎一の口入れ屋、「岩田屋」へ！

ただいまワーキングパートナー募集中！

熊五郎は、税関の係員の言葉を思いだしながら、次の広告に眼をやる。

「買って安心、売って安心、掘り出し物もたっぷり！」

親切な店員がお待ちしています！

メックのデパート「三濃屋」

ただいま隣のコーナーで、「メックご相談センター」開設中 →

なるほど隣に小さなカウンターがあり、若い係員がヒマそうに頬杖をついている。熊五郎が寄っていったら声をかけると、うれしそうにメックのことを一から説明しはじめた。

一通り説明を聞き終わり、備え付けのメックパーツ自動販売機で丸薬の回路をいくつか買ってカウンターを離れると、熊五郎は大きく息をついた。出島でずいぶん時間を取られてしまったが、さまざまな情報を断片的ながら聞き込み、思いがけず剣術の修業まで出来て、江戸群島に足を踏み入れる準備は十分とこのつたようだった。

◆  
ホールから足を踏みだすと、橋の向こうに長崎の町が見えた。異国風の屋根が立ち並んでいる。大きな橋を渡りかけたとき、橋の欄干から、ひとりの男が歩み出てきて、熊五郎の前に立った。がっちりした体格のサムライだった。

「税関での出来事、遠くから見えていたぞ。なかなかやるものだな」

サムライは大声で話しかけてきた。四角い顔に頬髭をのびし、鬚を大きく結い、いかにも威圧感のありそうな様子に、熊五郎は少しばかり圧倒された。

「おぬしが賞金稼ぎをやるのなら、一言挨拶をしておこうと思つてな。……もつとも、まだその腕では、わしのライバルというにはほど遠いな。……はっはっはっ。」

わしの名は鬼山又八郎、人呼んで「鬼の又八」。この群島の怪物どもを退治して、最強のサムライと呼ばれるために、

はるばるこの地までやってきたのだ。  
おぬし、気の毒だったな。わしが来た以上、おぬしがせいぜい頑張っても、名声も賞金も、全てわしにもって行かれるぞ。はっはっ、もつとも、お余りぐらいなら、分けてやらんでもない。そのときは頼みに来なさい。はっはっはっ、はっはっはっ……」

豪傑笑いを残して、鬼山又八郎は橋の向こうに去っていった。あまりのいい草に熊五郎はやや毒気を抜かれて茫然としていたが、われに返ると、長崎に向かう橋を、ゆっくりと渡りはじめた。